

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

神官の墓の発見： ペルー北高地パコパンパ遺跡における権力の萌芽

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5540

神官の墓の発見：ペルー北高地パコパンパ遺跡における権力の萌芽

関 雄二（国立民族学博物館教授）

2012年の発掘は墓の当たり年であった。近年のペルー考古学では、意図的に墓を狙って発掘する調査団が多い。もちろん墓は学術的に重要である。死者に対する儀礼の一部がそっくりそのまま切り取られたかのように見ることができるし、そこからは死にまつわる世界観に迫ることも可能である。墓の構造や副葬品の質から社会構造を復元する研究も多く、被葬者の自然人類学的分析からは、生前の健康状態、食習慣、あるいは供養の有無を語ることもできる。いわば当時の社会を語る証拠の山なのである。

しかし、私からみれば、それとともに大きな理由が別にあるように思える。すなわち発見に対するインパクトである。とくに学術の意味以上に、副葬品として貴重な金製品がでると、世間でも話題になりやすい。これが地味な建築構造だと、仮に懸命に報道機関に働きかけても、めったに取り上げられることはない。いったん、豪華な副葬品を伴う墓が出土すれば、発見者は時の人として祭り上げられ、墓にはニックネームが付与される。アンデス文明では文字が使用されず、被葬者の名前はわからないため、考古学者が勝手に名付け親になるわけだ。2009年に私が発見した『パコパンパ貴婦人の

墓』もその一つである。こうして発見が世間で注目されれば、いろいろと資金も集まりやすいし、考古学者のステイタスもあがる。墓の発掘ブームの背景には、学術以外のどろどろとした側面がついてまわるのが現実なのである。

パコパンパ遺跡とて例外ではない。私自身は有名になるかどうかについてあまり興味はないが、調査資金に関してはもちろん関心はある。とはいえ、残念ながら、他の時代や、他の地域で成功しているように、パコパンパ遺跡で墓を狙うということはさほど容易ではない。本誌でも何度かとりあげているように、パコパンパ遺跡は、アンデス考古学上、形成期（前3000年～西暦紀元前後）とよばれる文明初期の神殿遺跡である。形成期には、アンデス各地で神殿建設が活発化し、さまざまな形態の巨大な建造物が出現した。世界文化遺産にも指定されているチャビン・デ・ワントル遺跡もその一つである。ところが、チャビン・デ・ワントルにせよ、巻頭エッセイで触れたクントゥル・ワシ遺跡にせよ、はたまたパコパンパ遺跡にせよ、死者を葬った空間がとくに特定できているわけではないのである。後の時代になると埋葬基壇など死者の空間が分離されていることから墓は狙いやすいのだが、形成期の神殿遺跡では、狙いようがなく、墓の出土のほとんどは偶然の結果でしかない。

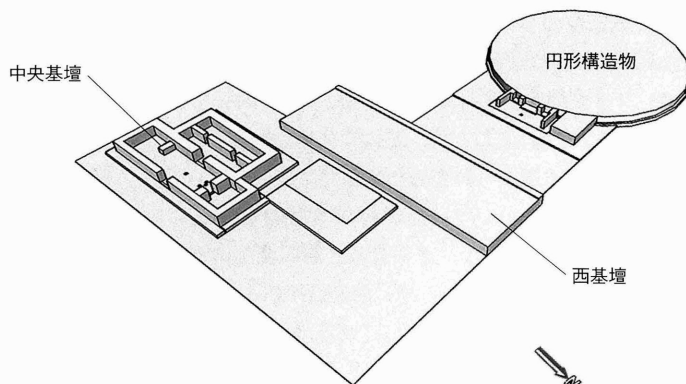
今年の墓の出土もそうであった。パコパンパ遺跡は三段の基壇より構成され、

おおよそ4ヘクタール、東京ドーム一つ分くらいの大きな神殿である。これまでの発掘により二つの文化期が確認され、I期とII期と名付けた。とくに出土する土器が二つの時期で全く異なる。各時期は、建築プランの大幅な変更から、それぞれA、Bに細分され、さらに増改築の変更を基準に細かく時期を分割している。したがってIA-(1)の上にはIA-(2)の建築が載っていることになる。こうした錯綜する建築の増改築のプロセスをここ8年にわたって追うち、遺跡における空間利用についてデータを集めてきた。

この結果、I期の前半にあたる時期（IA）では、最上段の基壇上に、大きな土留め壁が建設され、段差をもった空間が登場する。その壁の前に小型の基壇や窪んだパティオが築かれたことがわかった。I期の後半（IB）は、大規模な土木工事が展開され、建築プランも大々的に変更された。先の土留め壁によって支えられた基壇は埋められ、さらに大きな基壇（西基壇）によって包み込まれる。この基壇上には、直径28メートルほどの円形構造物が築かれ、その正面には方形の低層基壇が付設された。方形低層基壇上には、円形構造物の壁にそってベンチが設けられ、ベンチの正面には円形の炉が切られていた。よく焼けているところから、火の儀礼が行われたことが推定される。円形構造物の上は利用されたと考えられるが、アクセスは見つかっておらず、また頂上部も盗掘によって荒らさ



パコパンパ遺跡の位置



パコパンパI期後半の建築復元図

れているため検証はできない。

この円形構造物の南東側には、方形の基壇が築かれ、これをわれわれは中央基壇と呼んだ。中央基壇上には、厚みを持った壁で構成される部屋が5つ見つかった。入口は東側にあり、入って最初の部屋の床面だけが何度も張り替えられ、そのたびに炉も更新されたことが確認された。他の部屋はあまり使用されなかったようである。

続くII期になると、先の円形構造物は再利用されるが、ベンチは方形基壇によって埋められ、中央に昇降用の階段が設けられた。中央基壇も埋められ、その上に同じような部屋状構造物が築かれる。このとき、以前の建築軸がそのまま踏襲されていることが興味深い。「貴婦人の墓」は、この中心軸上、しかも中央基壇上の最初の部屋の床下から発見された。建設の途上でこの建物に聖なる力を込めべく、埋め込まれた墓であった。先述の建築軸を東の方向に伸ばしていくと、まず中央基壇の正面には比較的広いパティオが見られ、パティオ沿いには蓋のない排水溝が走っているのがわかる。さらに建築軸を伸ばしていくと、巨大なプールのように窪んだ広場に出会う。1辺が30メートルほどあり、各辺の中央には昇降用の階段が据えられている。この半地下式広場を中心にみれば、西側に中央基壇があることになり、北と南にも建築複合が展開する。これをアンデス考古学ではU字形配置と呼び、形成期の



金環や土器を副葬した墓、金環は顎の下より出土した。

建築の特徴としてしばしば言及されてきた。この配置はチャビン・デ・ワントル遺跡やクントゥル・ワシ遺跡にもある。

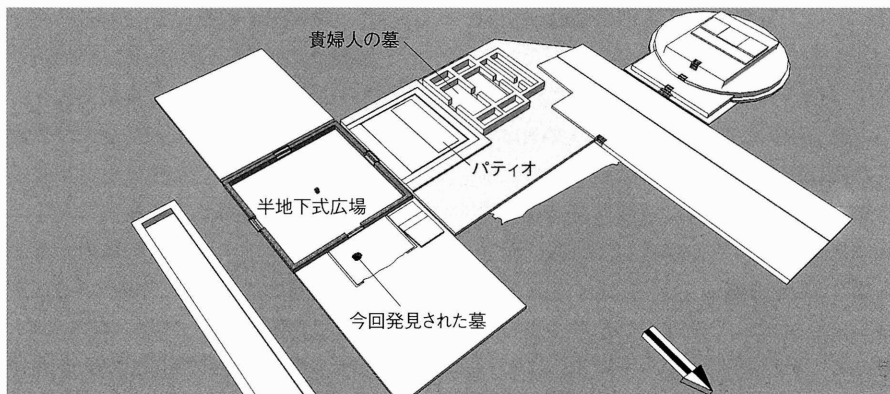
ところが、今年の調査で重大なことが判明した。半地下式広場の時期についてである。これまでクントゥル・ワシ遺跡の調査結果や、広場の部分的発掘の結果などを勘案し、II期と想定してきたのだが、今年の調査で、間違いなくI期（IB）と同定できる厚く白い床面がこの半地下式広場と同伴関係にあることが検出されたのである。これで遺跡のストーリーが変わってきたように思える。来年、再度の検証作業を進めていきたい。

さて、いずれにせよ、半地下式広場の周辺ではI期からII期にかけてさまざま

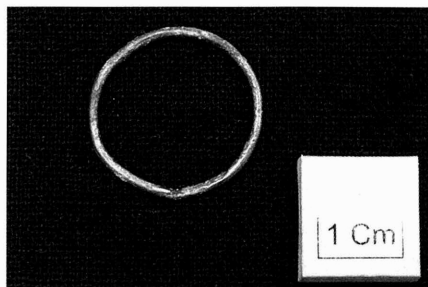
な活動が展開してきた。とくにU字形配置でいえば、北側にあたる部分の建築活動は複雑極まりなく、担当している国立サン・マルコス大学の考古学者フアン・パブロ・ビジャヌエバも毎年頭を抱えている。

この北地区からは、これまでパコパンバ遺跡で登録されている墓の実に90%近くが見つかっている。すべての北地区の墓はII期にあたる。ならば集団墓地なのかというと、どうもそうではなさそうである。墓の総数はわずか40あまりであり、巨大な神殿を支えた社会構成員の数とは隔たりがある。おそらく、神殿域で何らかの役割を担った選ばれた人たちが、特殊な事情で葬られたと考えたほうがよさそうである。

では特殊な事情とはいったい何であったのだろうか。すぐに思いつくのは祭祀にまつわる人身供犠である。後に北海岸で栄えるモチエ文化では、こうした証拠が神殿域から出土しており、土器に描かれた図像からも推定されている。しかしパコパンバの場合、自然人類学的分析からは、供犠の痕跡は認められない。すなわち被葬者の死因は、自然死、あるいは病死の可能性が高いのである。そこで注目したいのは、墓が設けられているコン



パコパンバII期の建築復元図



金環



サボテンを象った鉢。二重円はジャガーの斑点といわれる



銀製の針や孔雀石の紡錘車を副葬した墓

テキストである。すべてで確認されているわけではないが、どうも墓自体は構造物の中に埋め込まれているか、ある時期の構造物が放棄された後に設けられているように見える。ここから私が推測するのは、建築の増改築と被葬者の死との関係である。建築の増改築の計画が先ならば、被葬者はじつにうまく自然に死んだことになる。これではあまりに話がうますぎるし、骨に痕跡が現れにくい毒殺でも考えたほうがましかもしれない。むしろ、重要人物の死をきっかけに建物の増改築が図られたと考えたほうが、よっぽどすっきりする。おそらく北地区では、この地区の空間を利用した宗教的権威者が死ぬと、その人物を埋めながら建築プランの改変が図られたのではないかと考えられるのである。

金環と銀の副葬品

2012年9月18日、一時帰国していた私のもとに、金環が発見されたという一報が国際電話で届いた。現場はそのままにして、なるべくにも取り上げないように指示しながら、関係機関への報告、

日本や現地における報道のありかたを検討した。2009年の「貴婦人の墓」の発見である程度は慣れていたため、さほどあわてずに対応することができた。日本から急いでペルーの現場に戻り、観察してみる。墓の上部は後の建築活動によって荒らされた可能性があるものの、比較的浅い土壙墓であった。盗難の恐れから、金環だけはすでに写真と図面をとったのち取り上げていた。適切な処置といえよう。金環は直径が2cm、下顎骨の下から出土した。その場所から判断すれば、首飾りであったと考えるのが妥当である。頭蓋骨のそばには硅孔雀石（クリソコラ）の管玉が1点、黒色無文の鍔形土器が1点、足元には円文の内湾鉢が1点ほど添えられていた。残念ながら、調査チームの自然人類学者は、すでに帰国していたため、性別や年齢などの詳細は今後の課題として残るが、感触としては女性の墓のようであった。後日、骨を取り上げた後に観察してみると、口蓋に硅孔雀石の管玉が残っていることに気付いた。この状況は「貴婦人の墓」とよく似ている。アンデスでは、死者の口に石や

金属製品を含ませる習慣があり、形成期の埋葬でもいくつか確認されてきた。

驚いたのは、同時並行的に、あと3つほど墓が出土していた点である。いずれも金製品はないものの、立派な土器を伴う土壙墓である。安山岩の平石などで蓋をされるような形で発見された。この北地区の埋葬パターンともいえる。これらをサン・マルコス大学の学生二人が熱心に観察していた。一番遅れて検出された墓には、二体の被葬者が埋葬されていた。量はさほどではないが、あきらかに朱（辰砂）らしき赤色顔料が頭部を中心に見える。顎骨近くには、孔雀石（マラカイト）の紡錘車が置かれていた。そばからは硅孔雀石の球が出土した。量と場所から考えて首飾りの一種であったことがわかる。さらにその脇からは、銀製らしき針が出現した。一本の棒状金属を二つに折り曲げ、一方を他方にねじるように絡ませていた。後日清掃してみると、糸を通す針孔（めど）があり、また絡めた針の先端は、打撃により接合させていることがわかった。使用したとは思われないが、針、紡錘車などから判断して織物に関係



パコパンパ村の住民を対象にした遺跡説明会。毎年 100 人以上が参加する。

していた人物であったようだ。その意味で被葬者は、女性の可能性が高い。体つきがきゃしゃな点もこの見方を補強している。

さらに興味深いのは副葬された鉢の形態と装飾である。上から見ると楕円形の形状を呈し、壁面にはサボテンが立体的に描かれていた。サボテンは 2 面に対称的に描かれ、その間は二重円で覆い尽くされていた。二重円はジャガー文様ともいわれ、村の広場に据えられた、パコパンパ遺跡出土のジャガー石彫の胴体部分でも確認されている。それ以上に関心を引くのはサボテンのほうであろう。サボテンは、装飾というより幻覚剤として利用されることの多いサン・ペドロとよばれる種類に似ている。チャビン・デ・ワントル遺跡でも石彫に描かれおり、また北海岸から出土した形成期の土器でもしょっちゅう登場するモチーフである。被葬者がこうしたサボテンの幻覚剤を利用していたとするならば、まさにシャーマンと呼べるかもしれない。

たしかに金環も小型であるし、銀の針も小さく、2009 年に発見された「貴婦

人の墓」の副葬品よりは地味に見えるかもしれない。しかし、すでに述べてきたように、今年の墓の意味は大きい。「貴婦人の墓」はⅡ期の神殿建設の最中に埋め込まれた墓であり、実際にその神殿を動かし、聖なる空間を利用していた人々の実態に関しては不明な点が多かったからである。今回の墓は、まさにその神殿を動かしていた人物の墓であり、しかもその埋葬パターンから判断するならば、そうした人物の死をきっかけに北地区の建築の増改築が行われた可能性が示唆されるのである。その意味で、「貴婦人の墓」から推測された社会的差異の存在、大仰にいうならば権力の発生過程が再検出されたことになる。

村人に理解してもらうために開催した現場説明会には、新聞記者のほかにも、文化省カハマルカ支局長一行が来訪したばかりでなく、州知事まで現れた。この州知事、もと極左集団に属し、現在でもカハマルカ州における鉱山開発反対の先鋒に立ち、2016 年の大統領選挙を狙っているという噂の人物である。話してみれば、理解力のある好人物で、マスコミ

報道のイメージとはやや違うなという印象を持った。新聞記者の問いに対して表明したパコパンパ遺跡保存への資金援助については、全国紙にも掲載され、現在も州政府と交渉しているところである。やっぱり、金の墓の威力は絶大である。



関 雄二（せき・ゆうじ）

1956 年東京生まれ。東京大学助手、天理大学助教授を経て現職。専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979 年以来、南米ペルーにおいて神殿の発掘調査を行い、アンデス文明初期の社会の解明、および遺跡保存問題に取り組んでいる。著作として『アンデスの考古学』（同成社）、『古代アンデス 権力の考古学』（京都大学学術出版会）、『文明の創造力』（角川書店）、『アメリカ大陸古代文明事典』（岩波書店）、『古代アンデス 神殿から始まる文明』（朝日新聞出版）などがある。2008 年に濱田青陵賞を受賞。